㈡条件助詞

条件助詞は修件語を作り、条件・原因・理由等を表はす。必ずしも明確でない場合もあるが、大体時間的観念によって仮定条件と確定条件とに分ける。

〈文語〉

一、仮定条件

(1)順説　ば（未然形）（中世、たらば、ならば）

(2)逆説　と、とも（基本形）（中世、でも）

二、確定条件

(1)順説　ば（条件形）

(イ)自然的　雨降れば外出は止めたり。

(ロ)恒常的　雨降れば地固る。

一旦緩急あれば義勇公に奉じ以て天壌無窮の皇運を扶翼すべし。

(2)逆説　ど、ども（条件形）も、が、を、に（連体形）（中世けれども）

〈口語〉

一、仮定条件

(1)順説　ば（条件形）と（連体形）（たら、なら—完了の用語尾）

(2)逆説　ても、でも（連用形）

二、確定条件

(1)順説　ので、から（連体形）、と（連体形）（たら、なら—完了の用語尾）

(イ)自然的　迎へに来たので家を出た。

(ロ)恒常的　雨が降ると水に浸る。

(2)逆説　のに、が、けれど（連体形）

助詞の中、係助詞と条件助詞とは何れも陳述語の核に係るから、接続詞、感動詞と同様、図示する時は点線で囲む。

子供だけには知らせたくない。

雨が降ったので旅行は止めた。

（昭和五七・五・五）

は、も

青木は|大学は|出てゐる。

大学は|青木は|出てゐる。

「青木は」は主格の提示「大学は」は対格の提示であって、順序によって前にある方が後のより、意味の重味は優先する。

渡辺は|字は|うまくない。

「渡辺は」は主格第一種、「字は」は主格第二種の提示である。

太郎は|学校は|探しても居なかった。

「太郎は」は対格、「学校は」補格の提示である。

太郎は|本は|ちっとも読まない。

「太郎は」は主格、「本は」は対格の提示である。

次郎は|山には|行ってゐない。

「山には」は補格の提示である

今日は|天気がいい。（補格（で）の提示）

今日は|いい天気だ。（補格の提示。主格は「天候が」）

彼は|人がいい。（主格の提示）

「人がいい」は格助詞の埋没で用言。

象は|鼻が長い。（補格（で）の提示）

僕は|電車だ。（補格（に—手段）の提示）

僕は|お茶だ。（補格（に—願望）の提示「僕の欲しいのは」）

「は」は対格には「をば」、補格には「には」と格助詞の上に附くのが本来の用法であるが、間々略されても理解に苦しむことはない。主格に「がは」といふ用法がないのは上代には主格の格助詞「が」が無かったからである。格助詞「が」が出て来るのは上代の後期になってから時折の現象で、確立するのは中世である。従って上代で「花は咲けり。」と云へば主格の提示であって、云はば「花がは咲けり」の謂である。「は」は決して「が」に対立するものでもなく、同時に「が」に通ずるものでもない。次元が違ふのである。ただ古代には主格の格助詞として「い」が用ゐられてゐた様である。

否と言へど語れ語れと詔らせこそ志斐いは奏せ強語と詔る（万三—二三七）

「は」に対して「も」は「仮に例示すれば」とか「云って見れば」位の意味を持つもので、「は」を全提示とすれば「も」は半提示とでもいふべきであらう。

犬も|歩けば棒に当る。（主格の半提示）

学校も|探したが誰も|居なかった。（学校も—補格　誰も——主格）の半提示。

太郎は成人式を迎へ、少年も|終り立派な青年になった。（少年も—主格の半提示）

半提示が本義で並列は転義である。

これも|あれも|綺麗な花ばかりだ。

文語には「は」「も」の外に「ぞ」「や」「か」「なむ」「こそ」がある。

水が飲みたい。

字の書けるのを誇りとする。

この「が」が間々「を」にも変ったのは江戸時代の元禄頃からであるが、戦後は特に甚だしい。例へば「水が飲みたい。」が何時の間にか「水を飲みたい。」に圧倒されて来てゐる。「飲みたい」といふ用言は「飲む」といふ他動的な動作と「たい」といふ願望の合体で、本来は願望の意味である。それが「を」を伴ふのは「水を飲む」に引かれたのではなく、対象を求めることを好む様になったからであらう。最近の小説では大抵「彼女を好きだ。」といふ。「好きだ」といふ好悪の情には「好む」といふ他動的意味があり、その反面が喜ばれる様になったのであらう。古代「人に恋ふ」と云ったのが上代に「人を恋ふ」と変ったのと同じ現象かも知れない。

(ii)対格　他動性の動作の対象或は自動性の動作の過程や起点を示す。

を

本を読む。空を飛ぶ。家を出る。

(iii)補格　其の他補助的に用ゐられる資格を一括して補格といふ。

に、へ、と、で、より、から、まで等

昼から姉と二人で町まで買物に出掛ける。

(ロ)修助詞

修助詞は体言又は用言、或は格助詞に附いて、限定、累加、程度、呼掛、強勢等の意味を附与するのみであって修格語や修用語には関らない。従って本質的には関係語たる本来の意味を持たないから、助詞といふより接尾語の領域に近いものである。

文語　だに、すら、さへ、のみ、ばかり、くらゐ、まで、がな、がてら、やら、や、よ、ぞ等。

口語　さへ、ばかり、だけ、くらゐ、ながら、ね等。

子供だけに知らせたい。　子供だけ／に　知らせたい　（補格）

子供にだけ知らせたい。　子供に／だけ　知らせたい　（補格）

子供だけ置いて行け。　子供だけ　置いて行け　（対格）

子供だけの遊び場。　子供だけ／の　遊び場　（副体詞）

子供だけ待ちなさい。　子供だけ　待ちなさい　（主格）

書いただけ出しなさい。　書いただけ　出しなさい　（対格）

「子供にだけ」を除いて「子供だけ」は何れも体言であって、格助詞の有無を問はず、修格語の格は自ら定ってゐるのである。修助詞が格助詞に替ることはない。又「子供にだけ」の「にだけ」はやはり格助詞である。

(ハ)係助詞

係助詞は専ら格の提示をする。

と、も、又、たり、及び、並に

猫と小判と。猫も杓子も。山又山。

居ても立っても。見たり聞いたり。

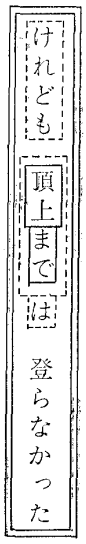
二、用言に伴ふ副詞や接尾語

と見から見。降りみ降らずみ。

三、言語全体を修飾する。言語の前意を受ける。

然し、蓋し、けれども

けれども頂上までは登らなかった。



(c) 感動詞

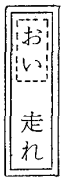
感動、呼びかけ、応答を表はし、言語全体を修飾する。

ああ、おい、はい

ああ綺麗だ

おい走れ！

はい承知しました。

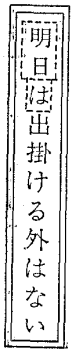


陳述副詞、接続詞、感動詞は点線を以て図示する。

(7) 助詞

助詞は関係語で機能的な修飾語たることを明示するものである。陳述語の核に現れることはなく、仮に存在することはあってもそれは既に形式化してゐて助詞の実質的意義を失ったものである。

明日は出掛ける外はない。



助詞には格助詞、修助詞、係助詞、条件助詞の四種があり、夫々修格語、修用語、修件語の機能を明示する。

(イ) 格助詞

格助詞は体言に附いて修格語の論理的関係を明示するもので、その資格を主格、対格、補格の三種とする。

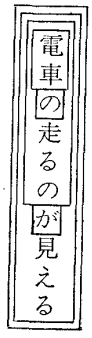
(i) 主格

(a) 第一種　動作・状態の主体を示す。

が、の

花が咲く。緑が美しい。

電車の走るのが見える。



犬が叩かれる。

額が掛けてある。額が掛ってゐる。

(b) 第二種　主格者の種々の情緒—可能、好悪、願望等—の指向する所在を明らかにする。

が、の

字が書ける。英会話が出来る。

人形が好きだ。古里がなつかしい。

(5) 副体詞

体言を修飾する。副体助詞「の」「な」などを伴ふが、独立性に乏しく副体詞の中に埋没してしまふ。文語の副体助詞には「つ」「が」「な」があるが、今日体言の中に埋没してゐる姿を見れば思半ばに過ぎるであらう。

つ—御食(みけ)つ国、目(マ)つ毛、家(ヤ)つ子(コ)（奴）、三ツ矢、四ツ谷

が—市ケ谷、朝日ケ丘、梅ケ枝餅、君が代、我が輩

な—水な本（源）、水(ミ)な門(ト)（港）目(マ)な子（眼）

の—一の谷、二の丸、鹿(シシ)の谷、日の丸弁当

註　鹿(シシ)—鹿(カ)の肉(シシ)

口語の「こんな」「あんな」「大きな」「小さな」等の「な」は副体助詞の一種であるが、本は「なる」であって文語の「あらゆる」「いはゆる」と同様用言の連体形である。従って用言即ち動言、状言、用語尾の連体形は総て副体詞である。本来の副体助詞は「が」と「の」とであるが、「が」が主観的なのに対して「の」は客観的である。何れも主格の格助詞にもなるが、中世以降「が」が確固たる主格の座を占めるに至ったのは主観性の本質に依るものであらう。副体助詞の「の」が殊更に「な」に変ったのは最近それも戦後に多い現象である。辞書などに所謂形容動詞の名が氾濫してゐる。例へば「真直ぐの道」だったのが今では「具直ぐな道」が普通の様である。

(6) 副用詞

用言を修飾する。副用詞には副詞、接続詞、感動詞があるが、何れも体言か用言に副用助詞が附くのが普通であって、副体助詞と同様副用詞の中に埋没してしまふ。

(a) 副詞

副詞には程度副詞、陳述副詞がある。

一、程度副詞　属性の状態の程度を修飾する。

(i)体言の儘修飾する。

大変、一個、一層、暫く、やがて、甚だ、最も、これだけ（だけ修助詞）

(ii)体言に副用助詞「に」「と」を附ける。

静かに、穏かに、堂々と、しっとりと

(iii)用言の連用形

早く、楽しく（状言）重ね〳〵（動言）

稀に基本形、返す〳〵（動言）

体言、用言何れも状態性の意味を有するもので、動言は少なく畳語にして状態性に変へる。

二、陳述副詞　陳述語を修飾する

もし、どうして、決して、勿論、必ず

決して御恩は忘れません。

(b) 接続詞

一、語と語とを結ぶもの

用言詞
副体詞
副用詞
助詞

(1) 体言辞

陳述語として用ゐられる体言をいふ。必ずとも未分化のもののみではない。

火事！

火事

午前十時開会。

午前十時開会

区立小学校に入学。

区立小学校に入学

(2) 用言辞

陳述語として用ゐられる動言、状言、複用言をいふ。次の様に活用する。

語幹＼語尾	
kak（書）	終止形
u	中止形
i	命令形
e	

太郎は字を書き、花子は絵を描く。

太郎は字を書き花子は絵を描く

公園まで走って行け。

公園まで走って行け

(3) 体言詞

修飾語として用ゐられる体言をいふ。

太郎は駅まで友達と散歩に出掛けた。

太郎は駅まで友達と散歩に出掛けた

(4) 用言詞

修飾語として用ゐられる動言、状言、複用言をいふ。次の様に活用する。

語幹＼語尾	
kak（書）	連用形
i	連体形
u	条件形
e	

地図を見ながら歩けば迷ふことはない

地図を見ながら歩けば迷ふことはない

この世が住み難ければあの世へ引越す外はない。

この世が住み難ければあの世へ引越す外はない

意味を砕いて云ふと

(1)どの天子様の頃でせうか（修用語—副用語）

(2)女御更衣が沢山御仕へしていらっしゃいました中に（修格語—補格）

(3)さほど貴い身分ではない方の（修格語—主格）

大変寵愛を御受けなさった更衣が（修格語—主格）

(4)あったさうです（陳述語—核）

となり、伊勢物語の冒頭の文と瓜二つである。

(1)昔　（修格語—補格）

(2)男　（修格語—主格）

(3)ありけり（陳述語—核）

五　品　詞

品詞は英語で“parts of speech”と云ふ。“speech”は云ふまでもなくパロルであるから、品詞はパロルの分割でなければならない。“noun”を「名詞」と置き替へるのはよいが、「名詞」には“case”の変化を表はすことが出来ない。“case”を表わす「助詞」が切離されて仕舞へば「名詞」といふ名称は品詞としては相応しくないことになる。従来品詞分類の基準は意義、形態、職能の三原則に置かれたが、本質的には意義も形態も附随的なもので一に係って職能にあると云はなければならない。“case”を表はす格助詞は専ら修格語に現れるが、「名詞」は修格語の外に陳述語の核にも用ゐられる。「動詞」の場合も同様に修格語にも陳述語の核にも用ゐられるが、その活用形が修格語には「連用形」「連体形」「条件形」であり、陳述語では専ら「終止形」である。従って修飾語と陳述語とを区別することが差当っての急務であると思はれる。古来支那語によって「詞」と「辞」といふ語が伝へられ、今日通俗的に「自立語」と「附属語」といふ様に理解されてゐる。これは訓点語の乎古止点—テ、ニ、ラ、ハ、ナリ、タリ等—に依る所が大きいので、始原的には孤立語たる支那語と膠着語たる日本語との交渉といふ歴史的宿命に基くものである。近来「詞」を客体的、「辞」を主体的に考へようとする向もあるが、今ここに「詞」を修飾語に「辞」を陳述語に当てて、体言詞と体言辞、並に用言詞と用言辞とに分けても決して奇矯ではないと思はれる。修飾語は間接的、陳述語は直接的な表現であるからである。

英語では“noun”の変化は二種類であるが“pronoun”の“I, my, me”の三種類に擬してよいであらう。これに当る日本語の格助詞は「が」「の」「を、に」である。この中で属格の「の」は連体修飾として体言に埋没してしまふから、修格語と見ることは出来ない。日本語の格助詞はこの他に「へ」「と」「で」「より」「から」「まで」などがある。

以上の観点に立って専ら職能による品詞分類を試みれば次の様に七種類になるのである。

体言辞

用言辞

体言詞

であるが、所詮修格語を始め修飾語が総て複線の陳述語の中にあることを物語るものである。

(2)修用語

修用語に属するものは提示語と副体語、副用語とであるが、副用語の中、副体助詞と副用助詞を伴ふものは単線を附し他は総て点線を以て囲む。点線のものは単線のものを越えて陳述語の核に掛ることにする。助詞は提示と修飾の為に附く係助詞、修助詞があり、副用語には潜在助詞（副体助詞・副用助詞）が附いてゐるものがある。

太郎は　成人式を迎へて　少年も終り　いよ〳〵

立派な青年になった

けれども　頂上まで　は登らなかった

はい承知致しました

提示語に附く係助詞は係結として、中世以降歌にもなって伝承されて来たのは興味深い。

ぞるこそれ思ひきやとはは　りやらん

これぞ五つのとまりなりける

即ち　ぞ――――る

こそ――――れ

思ひきや――とは

は――――り

や――――らん

の五つの呼応を指すもので、冒頭の「ぞ――る」によって連体形が基本形になって来たのである。

(3)修件語

条件を始め原因、理由等を表わす修飾語である。

出掛ける筈だったが　雨が降ったので　残念ながら

止めることにした

（「残念ながら」は副用語）

修件語は点線を以て囲む。

この修格語、修用語、修件語はそれぞれ常に固定するものではなく、関係語即ち助詞を附加構築する毎に相互に交替し、又立体的に交叉しながら、一様に修飾語として陳述語を補助運用して言語を統一して行くのである。文語に於ても口語の場合と何等変ることはない。

例へば源氏物語の、冒頭の文を挙げて説明しよう。

何れの御時にか

女御更衣あまたさぶらひ給ひける中に

いとやむごとなききはにはあらぬが

すぐれてときめきたまふ

ありけり

要求する文字言語（文章）に於てをやである。

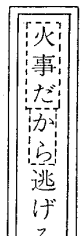
四　パロル

言語で最も簡単なものは絶叫とか感歎とか、一語で表現されるものとかである。

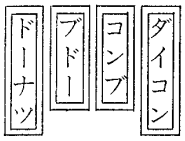
あッ！

火事！

瞬間に口に出たもので伝達の意図が無ければ別であるが、対者に何程かの反応を与へたとすれば言語と云へるだらう。「火事！」が「火事だ。逃げろ。」といふ言語主体者の意図ならば立派な言語である。これを陳述語と云って図で示す時には複線で囲むことにする。この未分化の段階では十分でないから、もっと正確に「火事だから逃げろ。」と云ひ直すとすれば「逃げろ」が核であるから「火事だから」は条件として抽出されたことになる。これを修飾語と云って陳述語の核を助けるものとする。この抽出された修飾語は陳述語の外に出ることは出来ないが一見核と対立するかの様である。図示する時は条件の修飾語は点線で囲むことにする。



同じ一語でも尻取遊びをする場合は未分化といふことは出来ない。それぞれの陳述語は「先づ最初にダイコンといふ単語を出すから、



最後の音節を頭に附けた単語を捜しなさい。」「はい、次はコンブといふ単語だ。」「はい、次はブドーといふ単語だ。」「次はドーナツといふ単語だ」といふ意味であることは確実である。

陳述語の核を一応陳述語として、これを修飾語との関係を平面的に言語の成分と云ってもよいが、本当は立体的に構築されてゐて、修飾語は陳述語の中に納るべきもので、抽出されて陳述語に懸るものが関係語で、云はば枘（ホゾ）に当る。これを助詞といふ。助詞はあるのが普通であるが、無くとも修飾語の資格を失ふことはない。修飾語には修格語、修用語、修件語の三種がある。

(1) 修格語

修格語は言語の論理的資格を附与する修飾語を云ふ。修格語の助詞は格助詞である。勿論格助詞が無くとも修格語の資格は十分である。

（「昨日」は補格）

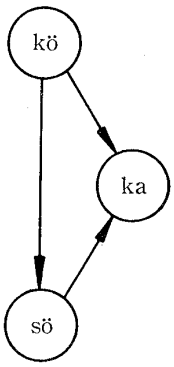
格助詞は修格語を作って陳述語から出ようとする様に見えるが、一方格助詞を伴った儘用言になったり体言になったりする。「人がいい」「ひととなり」「お気に入り」等がその例

〔kö〕から「これ」「ここ」「こちら」「かく」等の体言が生じ〔sö〕から「それ」「そこ」「そちら」「しか」等の体言が生れ〔ka〕から「かれ」「かしこ」「あそこ」「あちら」「ああ」の体言が出来るのである。又所謂連体詞「この」「その」「あの」「こんな」「そんな」「あんな」も同様である。又主体者本人を指して「僕」「私」「我が輩」と云ひ、対者を「君」「あなた」「貴様」、他者を「彼」「あの人」と云ふのも同様である。「僕は青木だ。」と云ふ「僕」は「青木」の代用ではない。「青木は青木だ。」では意味をなさない。「僕」は話してゐる本人自体の人物を指してゐる。対者に分ってゐる主体者の人物に就いて、名前を名乗ってゐるのである。言語主体者を指してゐる「僕」といふ言語は男なら誰でも云へるもので、その語はラングである。パロルは何かと云ふと、まだ名前は分らないがそこに立って発言してゐる男の姿である。指示語の本質はそこにあるのであって、そこに具体的に指示されてゐる意味がパロルである。それとは別のラングとは区別されなければならない。

〔kö〕と〔sö〕と〔ka〕の三角関係と云っても三者は銘々独立して存在するのではなくて、実に言語主体者によって統一されてゐるといふことが大事である。然も〔ka〕は〔sö〕の了解無しでは存在しない。

「それ、あれを持って来て！」

言語が成立つ為には「あれ」は両者共通のパロルであることが必要である。



(3) 関係語

体言と用言とを並べるだけでも言語は成立しない訳ではない。

三月一日、雨、降る、本読む。

雨　降る、出掛ける、止める。

私、行く、ある。

然しこれでは十分な日本語とは云へない。もっと論理的な構造や情緒的な表現を豊富にして、対者に伝達したり訴へたりするためには何かを加へたくなる。

三月一日　雨が降ったので止むなく本を読んで過した。

雨がひどく降るので出掛けるのは止めよう。

私は是非行きたい。

。印を附けたのは関係語で、、印を附けたのは情緒的な表現を加へたものである。勿論「降った」「過した」「止めよう」「行きたい」は前述した様に用語尾を添へて用言の意味を強化したものである。論理的な資格を表はす「が」とか「を」は日本語の原始には無かったのかも知れない。又「ので」の様な条件も古代では今日程の論理性はなく、もっと大らかで順説とか逆説とかの区別は覚束ない。「が」「を」は今日でも日常語で附かない場合もある。然し言語に於ける関係語の位置の重要なことは云ふまでもない。特に論理性を

推量	らしい	らしい	らしけれ	○	らしく
〃	まい	まい	○	○	○

接続の関係から見ると

一、未然形に接続するもの

文語 自然的—自発〔る〕—未発〔む〕〔まし〕〔まほし〕〈まくほし 体言
有意的—使役〔す〕〔しむ〕—打消〔ず〕

口語 自然的—自発〔れる〕—未発〔う〕
有意的—使役〔せる〕—打消〔ぬ〕〔ない〕

二、連用形に接続するもの

文語 自然的—完了〔ぬ〕—回想〔き〕—願望〔たし〕
有意的—完了〔つ〕〔たり〕—回想〔けり〕

口語 回想〔た〕—願望〔たい〕

三、基本形に接続するもの

文語 自然的—推量〔らむ〕
有意的—推定〔らし〕—〔べし〕〔めり〕〔なり〕—〔まじ〕

口語 自然的—推量〔だらう〕
有意的—推定〔らしい〕—〔まい〕

四、体言、連体形に接続するもの

文語 断定〔なり〕—比況〔ごとし〕

口語 断定〔だ〕—比況〔やうだ〕

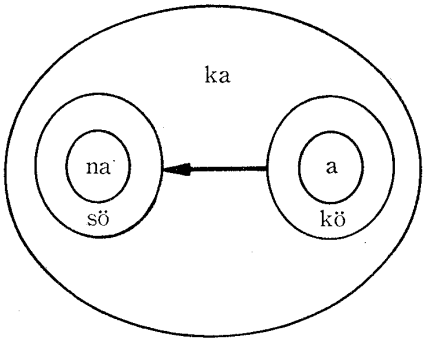
例へば「まじ」「まい」の様に時代的に変化するものもある。

上代〔基本形〕—中世〔u活ai活基本形〕〔lu活未然形〕

現代は大体「書くまい」「起きまい」「助けまい」「来(コ)まい」「為(シ)まい」であるが、段々「来(ク)まい」「来(ク)るまい」「為(ス)まい」「為(ス)るまい」が混用され、更に中には「起きるまい」「助けるまい」まで進んで再び上代の〔基本形〕に統一されさうな勢である。

(2) 指示語

指示語とは言語主体者と対者との関係を指示するもので、〔kö〕と〔sö〕と〔ka〕とがそれである。主体者を〔a〕（吾(ア)・我(ワ)）とすれば対者は〔na〕（汝(ナ)）であり、〔kö〕は〔a〕の周辺を指し〔sö〕は〔na〕の周辺を示すのである。而して〔ka〕は〔a〕と〔na〕との共通の周辺を指示する。〔ka〕は〔kö〕に比べて音声上口の開きが大きい故に音象徴として大きい場面を意味するものと思はれる。所謂コ、ソ、ア、ドの〔a〕は〔ka〕の脱落したものである。



〔kö〕〔sö〕〔ka〕の関係を図示すれば上図の様になる。

思はれない様である。

次に用語尾の活用は接続に自らの順序があり、上部のものには接続態の活用が備はって居り、下部になる程機能態の活用だけになって行くのは当然である。

（文語の用語尾）

	基本形	連体形	条件形	未然形	連用形
自発受身	る	るる	るれ	れ	れ
使役	す	する	すれ	せ	せ
〃	しむ	しむる	しむれ	しめ	しめ
打消	ず	ぬ	ね	○	ず
〃	じ	じ	じ	○	○
完了	ぬ	ぬる	ぬれ	な	に
〃	つ	つる	つれ	て	て
〃	たり	たる	たれ	たら	たり
回想	き	し	しか	○	○
〃	けり	ける	けれ	けら	○
〃	けむ	けむ	けめ	○	○
断定	なり	なる	なれ	なら	なり
〃	たり	たる	たれ	たら	たり

（らる―未然形〔a〕以外のもの）
（さす―未然形〔a〕以外のもの）
（ず＋あり―ざり）

（口語の用語尾）

	基本形	連体形	条件形	未然形	連用形
自発受身	れる	れる	れれ	れ	れ
使役	せる	せる	せれ	せ	せ
打消	ぬ	ぬ	ね	○	ず
〃	ない	ない	なけれ	○	なく
回想	た	た	たら	たら	○
断定	だ	な	なら	だら	だっ
未発	う	う	○	○	○

（られる―lu活系）
（させる―lu活系）
（よう―lu活系）

	未発	推量	〃	〃	〃	〃	〃
	む	らむ	らし	べし	まし	まじ	めり
	む	らむ	らし	べき	まし	まじき	める
	め	らめ	らし	べけれ	ましか	まじけれ	めれ
	○	○	○	○	ませ	○	○
	○	○	○	べく	○	まじく	めり
	なり	なる	なれ	○	なり		

中世　ulu　ilu　elu

十七世紀　u　elu　ilu　ulu

ulu　ulu　u　elu　ilu　ulu

ule　ule　e　ele　ile　ule

せぬ、せねばならぬ。
しない。しなければならない。

e　o　a　e　i
i　i　i　e　i

（ei活—為s）　（oi活—来k）　（ai活—死sin）　（e活—助tasuk）　（i活—起ok）

次に状言の活用の語尾は文語は「し」で口語は「い」である。「い」は動言と同様中世に連体形が基本形になる時、「き」の音韻脱落によって生じたもの。何れも音節として仮名で示す。文語には二種類あり、第一種、第二種とする。

第一種

語幹＼語尾	基本形	連体形	条件形	未然形	連用形
さむ（寒）	し	き	けれ	○	く

く（あらむ（からむ）／ありき（かりき））

第二種

語幹＼語尾	基本形	連体形	条件形	未然形	連用形
うれし（嬉）	うれし（語幹）	き	けれ	○	く

く（あらむ（からむ）／ありき（かりき））

さむ—空、さむ—げ、さむ—さう、さむ—さ、さむ—がる（主観的）、さむく—なる（客観的）
うれし—涙、うれし—げ、うれし—さう、うれし—さ、うれし—がる、うれしく—なる

口語は連体形が基本形になる時に語尾が「い」になって、第二種が第一種に合流する。

語幹＼語尾	基本形	連体形	条件形	未然形	連用形
さむ	い	い	けれ	○	く
うれし	い	い	けれ	○	く

く（あらう（からう）／あった（かった））

両者の活用は同一になったが意味の上では、第一種は客観的、第二種は主観的との区別は未だに残ってゐる。中世より第一種が第二種に用ゐられる、「深しい」といふ語が狂言にあるが、単なる訛とは

(2)
elu
活

語幹＼語尾	
k	基本形
elu	連体形
elu	条件形
ele	未然形
e	連用形

（蹴）

「蹴る」は上代ではelu活であるが、古代では「蹴ク う」と云ってulu活のe活であったと思はれる

語幹＼語尾	
kuw	基本形
u	連体形
ulu	条件形
ule	未然形
e	連用形
e	

（蹴）

kuwelu〉kwelu〉kelu

(3)
ulu
活

（a）
i
活

語幹＼語尾	
ok	基本形
u	連体形
ulu	条件形
ule	未然形
i	連用形
i	

（起）

（b）
e
活

語幹＼語尾	
tasuk	基本形
u	連体形
ulu	条件形
ule	未然形
e	連用形
e	

（助）

（c）
oi
活

語幹＼語尾	
k	基本形
u	連体形
ulu	条件形
ule	未然形
o	連用形
i	

（来）

（d）
ei
活

語幹＼語尾	
s	基本形
u	連体形
ulu	条件形
ule	未然形
e	連用形
i	

（為）

（e）
ai
活

語幹＼語尾	
ʃin	基本形
u	連体形
ulu	条件形
ule	未然形
a	連用形
i	

（死）

文語に対して口語はu活、ilu活、elu活に対しては何等の変化はない。変化するのはulu活だけである。係結の関係で中世になって連体形が基本形になってからであって、基本形と連体形の異ってゐたのはulu活だけだったからである。

上代	中世
u	ulu
ulu	ulu
ule	ule

その上に接続態の影響を受けてi活はilu活に、e活はelu活に、ai活はu活に移籍して行って、依然としてulu活に残るのはoi活とei活の二つで、これも連用形が未然形に変らうとしてゐる

ilu活、elu活、ulu活の四種類、更にu活を二種、ulu活を五種に小別して、全体として九種類となる。

基本形	機能態	接続態
連体形		
条件形		
未然形		
連用形		

一、u活

(a) u活　書く。（未然形書かず）

(b) iu活　有り、居り、侍り、在すがり。（四語）

二、lu活

(1) ilu活　着る、似る、煮る、干る、射る、鋳る、見る、（顧みる、試みる等）居る、率ゐる、用ゐる。（十語）

(2) elu活　蹴る。（一語）

(3) ulu活

(a) i活　起く。（未然形起きず）

(b) e活　助く。（未然形助けず）

(c) oi活　来。（一語）

(d) ei活　為。（一語）（他に勉強す、重んずの類）

(e) ai活　死ぬ、往ぬ。（二語）

仮名遣

ア行　得。（e活）

ワ行　居る、率ゐる、用ゐる。（ilu活）

ヤ行　射る、鋳る。（ilu活）

老ゆ、悔ゆ、報ゆ。（i活）

甘ゆ、嘶ゆ、癒ゆ、怯ゆ、覚ゆ、思ほゆ、消ゆ、聞ゆ、越ゆ、肥ゆ、凍ゆ、冴ゆ、栄ゆ、饐ゆ、聳ゆ、絶ゆ、費ゆ、潰ゆ、痿ゆ、煮ゆ、生ゆ、映ゆ、栄ゆ、冷ゆ、殖ゆ　吼ゆ（吠）、見ゆ、見ゆ、燃ゆ、崩ゆ、悶ゆ。（e活）

ハ行　右以外（逢ふ、思ふ、買ふ（u活）、教ふ、堪ふ（e活）等）

一、u活

(a) u活

語幹＼語尾	基本形	連体形	条件形	未然形	連用形
kak	u	u	e	a	i

（書）

(b) iu活

語幹＼語尾	基本形	連体形	条件形	未然形	連用形
al	i	u	e	a	i

（有）

二、lu活

(1) ilu活

語幹＼語尾	基本形	連体形	条件形	未然形	連用形
k	ilu	ilu	ile	i	i

（着）

基本形	機能態
連体形	
条件形	
未然形	接続態
連用形	

機能態（パロルの活用）を外とすれば
接続態（ラングの活用）は内であらう。

先づ動言の活用から考へると、基本形の語尾は必ず〔u〕である。語源的に見ると恐らく語幹に子音で終るものと母音で終るものとがあって、子音で終るものにはその儘〔u〕が附くが、母音で終るものには重母音を嫌って中間に〔l〕が添加して〔lu〕になったのではないかと思はれる。

書く　kak-u
着る　ki-u＞ki-lu

然し十八世紀に音図と仮名とを結び附けた先達に倣って音図を利用すると大変便利である。音図は子音と母音の切継であるから、子音を語幹、母音を語尾として

書く　kak-u　（u活と呼ぶ）
着る　k-ilu　（lu活と呼ぶ）

とすると何れもカ行の活用といふことになる。歴史の流れに従って先づ文語に就いて各行の動言を見ると、

	ア	カ	サ	タ	ナ	ハ	マ	ヤ	ラ	ワ
		k	ʃ	t	n	F	m	j	l	w
u活		書く kak—u	押す oʃ—u	立つ tat—u		買ふ kaF—u	読む jom—u		降る Ful—u	
lu活	得 ulu	着る k—ilu	混ず maʒ—ulu	落つ ot—ulu	死ぬ ʃin—ulu	干る F—ilu	見る m—ilu	老ゆ oj—ulu	下る ol—ulu	居る w—ilu

の様になるが、行別は余り必要でないので省略して、専ら母音以下を語尾として取扱ひ、語尾を基本形、連体形、条件形、未然形、連用形の順序に並べ、その連体形を以て主たる活用名とする。即ちu活、

（用語尾）　　〈文語〉

学生だ。（です、でございます）　学生なり。

褒められたからう。　褒められたからむ。

行かなかった。　行かざりき。

食べたくない。　食べたからず。

来まい。　来まじ。

（用尾辞）

雨か。雨ですか。雨が降りますか。

雪よ。雪ですよ。雪が降りますよ。

用尾辞は末尾について活用しない。末尾の活用語は基本形であるが、文語の「あるか」の様に連体形に附くのもある。（「ありや」は基本形。）

(iii)　活　用

用言は総て纏った概念語であって、用尾辞は別として複用言の場合、末尾の用語尾だけが活用する

〈口語〉　　〈文語〉

死んだ。（だ、だら）　死にたり。（たる、たれ）

死なれる。（れる、れれ）　死なる。（るる、るれ）

死なせる。（せる、せれ）　死なす。（する、すれ）

読みたい。（たい、たけれ）　読みたし。（たき、たけれ）

用言は一語として関係語を要求する

息子が戦争で死んだ。

母が戦争で息子に死なれる。

母が戦争で息子を死なせる。（強意的）

母が子供に本を読ませる。

私は本が読みたい。　私が本が読みたい。

子供は漫画が好きだ。子供が漫画が好きだ。

複用言をよく見ると、用言と用語尾、用語尾と用語尾の接続する所は活用してゐるが、全体としては末尾の用語尾しか活用しない。これはどういふことかと云ふと、意味を考へてラングを色々と作る為に用語尾を接続させるのであって、一旦ラングとして成立すると今度は改めてパロルとして働くのである。即ち「死んだ」（死にた）といふラングはその儘パロルとして「息子が戦場で死んだ」となる。ラングを基本形とすればパロルは終止形である。更にこのパロルは「死んだ息子」となったり、「息子が死んだら」と活用して言語を形成して行くであらう。この連体形と条件形とはパロルの活用であり、未然形と連用形とはラングを作る処の接続用の活用である。即ち連体形には体言、条件形には助詞、未然形、連用形には用語尾が接続するのが本筋の様である。時に基本形や連体形にも用語尾が附くことがあるが、寧ろそれは例外的のものと見るべきである。同様に未然形、連用形にも例外的に助詞が附いたり等するパロル性がある。ともかく用言の活用にはパロルとラングの二種があってどちらかと云へばパロルの方が重要である。

基本形〈（機能態）連体形—条件形（文語—確定条件　口語—仮定条件）
（接続態）未然形—連用形

状態性―一寸半歩ほど前。
一粁ばかり東。
事物性―男らしい立派な学生。
素晴しい白亜の殿堂。

体言には別に形式体言があり、本来の実質体言がその意義を失って形式化したものである。体言であることに変りはない。

体言であるといふ事。
どうしても行けない訳。
明日は必ず出掛ける筈。

(ii) 用言

概念を表はすもので総て活用するものを用言といふ。用言には動言、状言、複用言がある。

(a) 動言

動言とは動作や存在を表はすもの。語尾は〔u〕（文語も〔u〕稀に〔i〕）で終る。

（口語）
書く。（かく、かけ）
有る。（ある、あれ）
蹴る。（ける、けれ―けら）
死ぬ。（しぬ、しね）
見る。（みる、みれ）
起きる。（おきる、おきれ）

（文語）
書く。（かく、かけ）
有り。（ある、あれ）
蹴る。（ける、けれ―け）
死ぬ。（しぬる、しぬれ）
見る。（みる、みれ）
起く。（おくる、おくれ）
助ける。（たすける、たすけれ）
来る。（くる、くれ）
為る。（する、すれ）

助く。（たすくる、たすくれ）
来。（くる、くれ）
為。（する、すれ）

(b) 状言

状言とは状態、形状、色等を表はすもの、語尾は「い」（文語は「し」）で終る

（口語）
寒い。（さむい、さむけれ）
嬉しい。（うれしい、うれしけれ）
大きい。（おほきい、おほきけれ）
白い。（しろい、しろけれ）

（文語）
寒し。（さむき、さむけれ）
嬉し。（うれしき、うれしけれ）
大し。（おほき、おほけれ）
白し。（しろき、しろけれ）

(c) 複用言

複用言とは体言又は用言に形式用言、用語尾、用尾辞の附いたものを云ふ。

（形式用言）
学生で有る。（であります、でございます）
手伝って遣る。（てあげる、てさしあげる）
教へて貰ふ。（ていただく）
行く筈が無い。
動き相も無い。
読書をする。
買ふ処では無い。

からである。個人の生れさうして育ち、更に読書や旅行により見聞等を媒介とする「社会」は決して単一ではあり得ない。従って個人の保有する音韻、語彙、語法等に於ける言語は多種多様であるのが当然である。その上に心理的な面まで考慮に入れるとすれば、伝達は「概ね良好」の辺で満足しなければならないだらう。辞書はラングを集載してあるが、その意義は決して一様ではない。編著者の意義が概念化されるに至るまでの資料の多寡や整理の仕方が異るからである。要するに辞書の語彙は編著者個人のラングと見なければならない。又語彙は歴史的時代に於ても、地理的所在に於ても、生活様式に於ても、或は生物、無生物の種類、年齢の別など考へれば切りがない。何人と雖も総ての辞書に通ずる訳はなく、ラングが社会的に固定する謂れはないのである。そのラングに基いてこそパロルが引き出されるのであって、消化されないで他人のラングが迷ひ込む筈はないのである。ラングもパロルも共に個人の生涯の体験の集積の中に自ら形成されたものであって、決して個人の外に存在するものではない。又遠く離れた過去の時代の語彙、語法であっても、良しとして諾ひ容れれば個人のラングやパロルとして生きて来るのである。唯、言語は主体者と対者との二人のものであるから、主体者は常に対者を気遣いながら表現し、対者は主体者の側に立って理解しようと努力し、相互の歩み寄りによって両者の差を縮める外はない。童話の語り手が児童を前にして、一人々々の目を如何にして引きつけ、如何にして生々と輝かせようかと苦心するかを考へれば、表現の妙味は自ら会得出来るであらう。

三　ラ　ン　グ

ラングには概念語、指示語、関係語がある。

(1)　概念語　概念語には体言と用言とがある。

(i)　体言

概念を表はすもので総て活用しないものを体言と云ふ。

(イ)物の名前　木、草、犬、台、建物

(ロ)抽象の名　誠、東、重要、丈夫、堂々、静か

(ハ)象徴の名　わんわん、がちゃん、すらり、ひんやり

(ニ)数の名　一、五、第三、零

(ホ)接辞　静けさ、厚み、眠け、百年目

体言には又動作性の意味と状態性の意味とを持つものがあり、前者には「する」が附き、後者には「な」或は「の」が附く。

動作性―勉強する、運動する、登山する、哲学する、科学する、純情する（映画の題名）

状態性―静かな、丈夫な、元気な、真直ぐな（の）

これらは何れも特殊のものであって、事物性のものと区別しなければならない。従って前者には所謂副詞的修飾語が附き、後者には所謂連体的修飾語が附く。

動作性―三月一日いよいよ卒業。

四月一日めでたく入学。

明日からいよいよ学生。

来る。（きたる、きたれ）（文語）

「来る」は今日では所謂終止形と命令形だけしかない。「来る十日」と云ふ様に日附にだけ附く特殊な用法は、連体形ではなく所謂連体詞といふべきである。即ち「来る」は口語ではなく、口語の中に残存する文語の化石である。明治の後半には口語文と文語文とが併存してゐて、「来る」は文語文の中に生きてゐた。それは戦時中まで続いた。憲法を始めとして諸法律の条文から日常書簡の候文や履歴書、借用証書に至るまで、文語文で漢字と片仮名の「仮名交り文」であった。戦後始めて平仮名交りの日本国憲法が誕生して文語体が消滅し、同時に「来る」も口語の中に埋没した。さうして「来ル」の送仮名も「来たる」として古典に登場する様になった。高校検定教科書の藤村の「落梅集」には「大いなる詩歌の時は来たりぬ」とある。テレビの高校講座で「来たりぬ」は「来」に完了の「たり」と「ぬ」が附いたものといふ講義を聞いて驚いたことがある。古典に現代かなづかいや勝手な送仮名を適用して貰っては困るのである。

二　言　語

言語には観念的なものと具体的なものとがある。前者をラング（第一音節を高くラングと発音する）と云ひ、後者をパロル（第二音節を高くパロルと発音する）と云ふ。「今日はいい天気だ。」と観念的に云ふことも出来るが、これは実際に筆者がこの正月に呟いた言葉である。それを考へると先づ「今日」は脳裏に潜んでゐる「午前零時から午後十二時迄」といふ意義の中から取出して、昭和五十七年一月一日」といふ意味に振替へたのである。意義といふのがラングであり、「意味」といふのがパロルである。上代だったら「今日」の意義は「夜明から日没まで」の日中を云ふのではないかと思ふ。次に「は」は特に「今日」を提示したのである。語法的に云へば「今日は」は主語ではなく補格の提示である。「いい」の意義も沢山ある中で「穏かでめでたく、正月には珍しく暖かく晴渡った」意味を込めて自分自身に呟いたから「天気だ」と云った。他人だったら「天気ですね」と云ふ所だらう。この様に言語といふのは唯ラングの積重ねではなくラングとパロルとが綯交ぜになって積重ねられて行くものである。ラングとパロルとの関係は氷山の様に一体のもので、海面に現れてゐる所がパロルで海中に大きく隠れてゐる部分がラングなのである。その都度変ればこそパロルには具体的な表現が可能となる。

言語は言語主体者が自己の意図を対者に伝達することを目的とする。伝達することが出来なければ言語とは云へない。処が完全無欠に伝達することは不可能である。ラングもパロルも実は個人のものだからである。曲りなりにも伝達することが出来るとすれば、それは主体者と対者とのそれぞれの体験を育んだ社会が共通する所多い

	ワ wa	ラ la	ヤ ja	マ ma	ハ Fa		ナ na	タ ta		サ sa		カ ka	ア a
	(イ i)							チ tʃi		シ ʃi			イ i
	ウ u							ツ tsu		ス su			ウ u
	(エ e)							テ te		セ ʃe			エ e
(清音44)	(オ o)							ト to		ソ so			オ o
					パ pa	バ ba		ダ da		ザ za		ガ ga	
					ピ pi	ビ bi		ヂ dʒi		ジ ʒi		ギ gi	
					プ pu	ブ bu		ヅ dzu		ズ zu		グ gu	
					ペ pe	ベ be		デ de		ゼ ʒe		ゲ ge	
(濁音25)					ポ po	ボ bo		ド do		ゾ zo		ゴ go	
	クワ kwa	リャ lja	(ヤ ja)	ミヤ mja	ピャ pja	ビャ bja	ニャ nja	ヂャ dʒa	チャ tʃa	ジャ ʒa	シャ ʃa	ギャ gja	キャ kja
	クヰ kwi	リュ lju	ユ ju	ミュ mju	ピュ pju	ビュ bju	ニュ nju	ヂュ dʒu	チュ tʃu	ジュ ʒu	シュ ʃu	ギュ gju	キュ kju
(拗音36)	クヱ kwe	リョ ljo	(ヨ jo)	ミョ mjo	ピョ pjo	ビョ bjo	ニョ njo	ヂョ dʒo	チョ tʃo	ジョ ʒo	ショ ʃo	ギョ gjo	キョ kjo

来る。（くる、くれ）（口語的）

来る。（きたる、きたれ）（文章語的）

第四期　現代―十七、十八、十九、二十世紀

仮名、漢字整調時代、漢籍殊に支那小説の影響を受けて漢字は大いに増加したが、それだけ訓読も自由に行はれ当字も多くなり、啓蒙の必要上漢字は総て「かな」で振仮名を附ける様になった。明治時代に入ってから漢字や仮名遣の論議が盛になり、戦後山本有三氏のルビ廃止論が実行に移され、当用漢字や現代かなづかいが内閣告示となって世に現れ、先づ学校教育に適用され、次いで新聞、雑誌もその採用に踏切った。

音韻―二十世紀の音韻と略〻同じ。ハ行子音が〔h〕になったのは十七世紀であるが、四ツ仮名や合拗音は少数派ながら教育的には認められてゐた。実際に消滅したのは戦後であった。オ列長音は開合の別は無くなり一色に塗り潰されたので「現代かなづかい」では「行かう」も「行きませう」も「おとうさん」も一様に「こう」「しょう」「とう」となった。「美しう」も同様に「しゅう」になり「言ふ」は「ゆう」にならないで「いう」になった。

語法―蹴る。（ける、けれ―蹴らない、蹴（リ）ツた）

起きる。（おきる、おきれ）

来る。（くる、くれ―来ない、来た）（口語）

ある。

日本語は古く「漢委奴国王」の金印の一世紀から、漢字との接触を思はせるが、歴史時代に入った七世紀から今日までの変遷の過程を簡単に辿ってみると、大凡四期に分けることが出来る。

第一期　古代―七、八世紀

漢字時代。総て漢字で日本語を表記した。

音韻―所謂特殊仮名遣。衣（e）と延（je）の区別があった。

語法―蹴（ク）う。（くうる、くうれ）

起（オ）く。（おくる、おくれ）

来（ク）。（くる、くれ）

来（キタ）る。（きたる、きたれ）

鳥とふ大をそ鳥のまさでにも来（キ）まさぬ（伎麻左奴）

君を子ろ来（ク）（許呂久）とそ鳴く（万十四・三五二一）

帰りける人来（キタ）れり（伎多礼里）といひしかばほとほと死にき君かと思ひて（万十五・三七七二）

第二期　上代―九、十、十一、十二世紀

仮名漢字併立時代。九世紀から仮名が出来て、和文脈と漢文脈（訓読文）とに分れ、主として前者は女性、後者は男性のものとなった。

音韻―十世紀の音韻と略々同じ。ア行のe（ウ、え）とヤ行のje（エ、ゑ）は十世紀の初頭まで僅かに残ってゐた。

十一世紀にハ行の転呼音が生じた。

第一音節

ハ Fa	ハ wa
ヒ Fi	ヒ wi
フ Fu	フ u
ヘ Fe	ヘ we
ホ Fo	ホ wo

第二音節以下

ハハ（母）ハ　Fa Fa Fa／Fa wa Fa／Fa wa wa

語法―蹴（ケ）る。（ける、けれ―蹴（ケ）ず、蹴（ケ）たり）

起（オ）く。（おくる、おくれ）

来（ク）。（くる、くれ）（和文脈専用「とくこ」（源氏物語））

来（キタ）る。（きたる、きたれ）（漢文脈専用「速かに来れ」）

第三期　中世―十三、十四、十五、十六世紀

仮名、漢字混淆時代。和文脈と漢文脈の調和した、平家物語の様な和漢混淆文が生れた。

音韻―転呼音としてオ列の長音に開音と合音とが生じた。〔au〕が〔ɔ:〕になったものが開音であり、〔eu〕〔ou〕が〔o:〕となったものが合音である。例へば「行かう」が開音であり「行きませう」や「おとうさん」が合音である。第四期になると開音は合音に合流して〔o:〕の一つになる。

語法―蹴（ケ）る。（ける、けれ―蹴（ケ）ず、蹴（ケ）たり）

起（オ）くる。（おくる、おくれ）

（第三期）

十世紀

ワ wa	ラ la	ヤ ja	マ ma	ハ Fa	ナ na	タ ta	サ ʃa	カ ka	ア a
ヰ wi	リ li	イ i	ミ mi	ヒ Fi	ニ ni	チ ti	シ ʃi	キ ki	イ i
ウ u	ル lu	ユ ju	ム mu	フ Fu	ヌ nu	ツ tu	ス ʃu	ク ku	ウ u
ヱ we	レ le	エ e	メ me	ヘ Fe	ネ ne	テ te	セ ʃe	ケ ke	エ e
ヲ wo	ロ lo	ヨ jo	モ mo	ホ Fo	ノ no	ト to	ソ ʃo	コ ko	オ o

（清音47）

バ va	ダ da	ザ za	ガ ga
ビ vi	ヂ di	ジ zi	ギ gi
ブ vu	ヅ du	ジ zu	ギ gu
ベ ve	デ de	ゼ ze	ゲ ge
ボ vo	ド do	ゾ zo	ゴ go

（濁音20）

クワ kwa		
クヰ kwi		
クヱ kwe		

（合拗音3）

二十世紀

マ ma	ラ la	ナ na	タ ta	サ sa	カ ka	ハ ha	ヤ ja	ワ wa	ア a	
ミ mi	リ li	ニ ni	チ tʃi	シ ʃi	キ ki	ヒ çi	イ i	(イ i)	イ i	
ム mu	ル lu	ヌ nu	ツ tsu	ス su	ク ku	フ Fu	ユ ju	ウ u	ウ u	
メ me	レ le	ネ ne	テ te	セ se	ケ ke	ヘ he	エ e	(エ e)	エ e	
モ mo	ロ lo	ノ no	ト to	ソ so	コ ko	ホ ho	ヨ jo	(オ o)	オ o	

（清音44）

ダ da	ザ za	ガ ga	パ pa / バ ba
(ジ ʒi)	ジ zi	ギ gi	ピ pi / ビ bi
(ズ zu)	ズ zu	グ gu	プ pu / ブ bu
デ de	ゼ ze	ゲ ge	ペ pe / ベ be
ド do	ゾ zo	ゴ go	ポ po / ボ bo

（濁音23）

ミヤ mja	リヤ lja	ニヤ nja	(ジヤ ʒa)	チャ tʃa	ジャ ʒa	シャ ʃa	ギャ gja	キャ kja	ピャ pja	ビャ bja	ヒャ hja	(ヤ ja)
ミユ mju	リユ lju	ニユ nju	(ジュ ʒu)	チュ tʃu	ジュ ʒu	シュ ʃu	ギュ gju	キュ kju	ピュ pju	ビュ bju	ヒュ hju	ユ ju
ミヨ mjo	リヨ ljo	ニヨ njo	(ジョ ʒo)	チョ tʃo	ジョ ʒo	ショ ʃo	ギョ gjo	キョ kjo	ピョ pjo	ビョ bjo	ヒョ hjo	ヨ jo

（拗音33）

日本語法要訣

矢野文博

一　日本語法

日本語法とは日本語といふ言語の法則である。日本語と国語とは些か趣を異にする。日本語に対立するものは英語（English）や米語（American）であり、国語に対立するものは外国語一般である。国語はその国の母国語であるから、国家意識やそれに伴ふ愛憎のあるのは止むを得ない。オリンピックに於ける国旗や国歌は否応なしに国家意識を煽るが、競技に対する興味を倍加もする。国語が主観的なのに比して日本語は客観的と云へるだらう。言語には音声言語（言葉）と文字言語（文章）とがある。前者を口語と云へば後者は文語といふことになるが、明治二十年頃から言文一致の運動が起って、文章に口語文と文語文とが出来、口語と口語文とは非常に近いものになった。近いと云っても両者は本質的に違ふから決して同一ではない。口語文が出来るまでは音声言語と文字言語とは明らかに銘々別の語法を持ってゐた。音声言語を知り得る現在では現在の文字言語との差異を弁別することは出来るが、文字言語しか存在しない過去の時代では、種々の資料を調査して両者の区別を推定する外はない。上代にもそれぞれの音声言語（口語）と文字言語（文語）とが存在した筈である。今日一般に口語と云ひ文語と云ふのは現代語と上代語即ち今と昔との関係である。上代語は集約して凡そ十世紀に目安を置いて来た。その頃日本語の音韻体系が確立して「音図」が出来、同時に文字表記の「かな」が整備されて「いろは歌」が生れたからである。作者弘法大師の伝承がそれを証明してゐる。十世紀の音韻と二十世紀の音韻を示すと次の通りである。

十世紀の音節の七十に対して、二十世紀の音節は丁度百といふことになる。二十世紀の今日に於て音韻はその儘二十世紀の音韻に従ひながら、「かな」だけ十世紀の音韻に依ることを規定したものが、本当の仮名遣であり歴史的仮名遣とも表意仮名遣とも云はれるものである。即ちいろは四十七字に依る書分けで、専ら視覚によって意味の弁別に資するものである。中世では「京」を最後に加へていろは四十八字（狂言「いろは」）であり、明治年間懸賞募集によって作られた「とりな歌」は「ん」を加へて四十八字になってゐる。今日広く使はれてゐる「現代かなづかい」は所謂表意仮名遣と表音仮名遣の折衷であるが、その準拠する「現代語音」は二十世紀の音韻で